

瀬里広明著 『露伴と道元』

松本, 常彦
九州大学大学院 (博士課程)

<https://doi.org/10.15017/11972>

出版情報 : 語文研究. 63, pp.71-72, 1987-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

瀬里広明著 『露伴と道元』

松 本 常 彦

その名を知るほどの人であれば、露伴と道元がともに一世を蓋う巨人であることを認めるのに吝ではあるまい。今日、こころみに書店を覗いた人が、棚を塞ぐ道元関係の書籍のにぎわいの一方で、露伴のそのの寥々たるさまを見出したとしても、その対照は、畢竟、歴史という平野のかなたに屹立した峰々をきわめることの至難をか物語ってはいない。峰の高さ広さ深さが人を誘いそして拒む。いずれにせよ匆卒として登るには危うい。加えて、一方の峰は近く、一方の峰は遠く、山色も山容も異なるといった事情もからむ。すなわち、一峰への登攀の術が、別の登攀を保証しているとはかぎらない。ここに読者の関心が生じる。

「露伴が道元についてまとまった文章を書いたのではない。」とは本書冒頭の一文。すでにそういう前提があり、しかるのちに「露伴的視点から道元にアプローチしよう」というくわだてに発したかかるとタイトルの本が存している。著者はどうやら露伴を語るに際し、露伴文中にいぞその姿を見せぬ道元を何としても召喚せねばならなかったけしきである。それはなぜか。

ことは著者のいう露伴的視点あるいは著者の露伴観に係ろう。

本書は、「露伴と道元における愛」・「仙書参同契と正法眼蔵——露伴における東洋と西洋——」・「繫念」・「観画談」とその背景・「露伴の貧窮観——貧窮の創造的意味——」の五本の論稿より成り、それぞれ主材としてとりあげられる作品に異なりはあるものの、巻を通じてしばしば「仙書参同契」に筆が及んでいる。あとがきの中で著者が第二章を本書の主論文であると述べるのも所以なしとしない。露伴全集で研究の部に収まる「仙書参同契」は、露伴が「周易参同契」を丹道の祖書と見てこれに解説をほどこしたものの、著者がこれに接するのは昭和十六年「思想」掲載のとき以来というから、その関心の持続はすでに半世紀に亘らんとしていることになる。ただし、繫念とはそのような精神の態度を指して云う語であろう。いま卒然と露伴晩年の手になるこの書を読めば、仙界の消息を伝えているだけに、時流に縁なき閑文字のよそおいがある。この場合、時流とはむろん戦下の時代状況をいう。かかる作に接すれば、露伴文学にはアクチュアリティがないという悪口も、かならずしも悪口には聞こえない。しかし、その時流の中でこの書に出会った当の人々の一人である本書の著者はそうは言わない。「仙書参同契」の読みど

ころが別にあることを説き、アクチュアリティに關しても事情が逆であることを教える。その間の経緯を露伴の馬琴評をかりてたとえるなら、露伴は、時代と平行に歩むのではなしに、洋化の一途をたどった日本の近代に対してつまりは時流に対して、東洋的テオソヒーを伝える△自然▽の所在を明らかにすることで、時代と垂直に切りむすんでいたとでも言い得よう。右の評価は読者に著者の立つ地点を知らせる。露伴山脈の頂きに△自然▽を仰ぎ見るような場所である。もちろん、このとき△自然▽は漠然とした観念ではない。

露伴の宋学的精神に培われたものだという。露伴の△自然▽の背後に宋学的精神を見出す著者にとつては、「渡宋して宋代精神界に直接に触れた道元」は尋ねなくてもむこうからおのずと姿を現わす人物であつたらう。むろん、露伴にも「仏典について造詣が深く、『大藏經』を二回も読破したという」下地がある。役者に不足はない。われわれ読者は、著者に案内されて、露伴と道元が際会する場に立ち会うことになる。

こまかなことを省いて言えば、そこに見られるのは、悲心と仁心とが外柔内剛の柔軟心において、只管打坐と繫念とが一を保つという態度において、洗浄洗面と神通応物とが喫茶喫飯底の日常の重視という点において、つまりは、時と処と表現と立場を違える道元と露伴とが△自然▽という場において交流し、そこからめいめい外的自然と内的自然が相即相入の關係にある向内的△自然▽の深处に分け入っていく様子である。さて、こう書いてくると、いやでも目につくのが△自然▽なる一語であろう。しかし、この△自然▽なる一語こそ紹介し難きもの。浅慮で紹介しようとするれば、かえつて著者の意を酌み損なう。よろしく本書に就かれたたい。

ただ次のようなことは言える。

露伴と道元の交流劇を主宰した著者は、その交流によっていっそう磨きのかかった△自然▽という鏡をもって、その交流の場からふたたび露伴の面晤していた問題に赴いているということ。あとがきの「道元と關係のないような他の論文にも、道元が顔を出しているはずである。」との一文も所以なしとしない。ところで、△自然▽によって照らし出される問題とは何か。本題から見ればやや奇異な第二章の副題および第五章の題がそれを暗示しよう。すなわち、東西の文明の問題、文明と個人の係りの問題、個人と生活の係りの問題となろうか。ここで、人は著者にすでに『文明批評家としての露伴』があるのを思い出すのもよいかも知れない。西洋の自然科学的自然觀機械的自然觀を基盤にした合理主義的文明の限界を照らし出す文明批評家露伴の追求が一貫してなされてきたことを知るだろう。そのとき、ニーチェ、ハイデッカー、朱子、鈴木大拙といった人々からユング、F・カブラ、楠本正継、公田蓮太郎といった人々まで広きに涉つて本書を往來する東西のそして古今の思想家の群れは、さながら、露伴というまた△自然▽という鏡にいつそうの効用を与える光源の如き觀を呈すことになる。

すでに紙数も尽きる。最後に附言すれば、本書の紹介において、本文の抄出や各章の内容の約言に意を須いかなかった。自らの不明は恥じつても怠惰からではない。元來、本書は、抄出を嫌い約言を匆ねつけるように見うける。けだし、そこに著者の筆法が存しよう。

妄言多謝。

(一九八六年十一月十五日發行 創言社 三五〇〇円)